

震宝館だより

題字・畚野光義師

靈宝館だより 第124号

平成29年10月11日発行

和歌山県伊都郡高野町高野山3006

公益財団法人高野山文化財保存会

高野山靈宝館

電話0736-56-2029

URL <http://www.reihokan.or.jp>

利用案内

■開館時間

■5月1日～10月31日

8時30分～17時30分

■11月1日～4月30日

8時30分～17時00分

■休館日 年末年始のみ

■拝観料 大人

高・大学生 600円

小・中学生 350円

250円

高野町に住居票がある方、高野町内の学校に在籍する学生の方は入館無料です。

■専用駐車場あり



熊谷運生房(直実) (右)・平敦盛 (左) 供養塔(奥之院)
一ノ谷の戦いで美貌の若武者、敦盛をやむをえず討ち取った直実が、その後出家した話は『平家物語』でも有名なエピソードの一つです。



クマガイソウ(写真提供 前地淑江氏)
下側の花弁が、昔の武士が背負った武具の母衣ははえに似ていることが名前の由来です。同属にアツモリソウもあります。

第38回大宝藏展
「高野山の名宝」
平家物語の時代と高野山
10月14日(土)～12月3日(日)

第124号 目次

- 大宝蔵展のご案内……………2～3
- 収蔵品の紹介98……………4
- 高野山の古建築第二十八回……………5
- 高野山の考古学(十六)……………6～7
- 西塔内部特別公開 報告……………8～9
- 高野山の文書(十二)……………10
- 高野山靈宝館からのご案内・館長ご挨拶……………11
- 靈宝館の庭園41……………12

毎月21日(弘法大師の日) ご来館の方にプレゼントあり！ ホームページ割引券もご利用ください

血曼荼羅、5年ぶりの展示



金剛界



胎藏界

重文 両界曼荼羅図（血曼荼羅） 金剛峯寺

第38回 大宝蔵展

「高野山の名宝」

平家物語の時代と高野山

期間：平成29年10月14日(土)～12月3日(日)

会期中無休

本展では展示替は行いません。

(文化財の状況により、やむをえず変更する場合があります)

※関西文化の日に協賛し、11月20日(月)を無料開館日とします。

※和歌山県の「ふるさと誕生日」に賛同し、11月22日(水)を無料開館日とします。

平家物語は十二世紀頃からの平家の繁栄と滅亡を語った物語ですが、物語の中には何度か高野山が登場します。代表的なものに、平清盛が大塔を再建した時にお大師様に出会った話があります。この出会いをきっかけに信仰心を深めた平清盛は、自分の頭の血で胎藏界の大日如来を描いた曼荼羅を奉納しました。その曼荼羅は『血曼荼羅』と呼ばれ、今も霊宝館に収蔵されています。今回の大宝蔵展では、この重要文化財『両界曼荼羅図』（血曼荼羅）をはじめ平安、鎌倉時代の貴重な文化財を展示すると共に、平家物語の中で登場する高野山を紹介いたします。

主な展示品

絵画

- 重文 両界曼荼羅図（血曼荼羅） 金剛峯寺
- 重文 弘法大師・丹生・高野明神像（問答講本尊） 金剛峯寺
- 重美※ 星供曼荼羅図 親王院



重文 不動明王三童子像

○平成28年度 重要文化財(美術工芸品) 絹本着色不動明王三童子像保存修理事業
五坊寂靜院蔵「不動明王三童子像」の修理がこのほど完了いたしました。今回、修理後初めて公開いたします。

コーナー展示 補助事業報告



千手観音菩薩立像(伝源義経守本尊) 金剛峯寺



重文 不動明王坐像(伽藍不動堂旧在) 金剛峯寺



重文 上杉謙信霊屋

○平成29年度 重要文化財(建造物) 上杉謙信霊屋保存修理事業
修理の概要と経過報告をパネルで紹介。



国宝 金銀字一切経(中尊寺経) 金剛峯寺

彫刻

- 阿弥陀聖衆来迎図(複製) 有志八幡講
- 長尾景虎像(上杉謙信) 清浄心院
- 立花宗茂像 大円院
- 不動明王坐像(伽藍不動堂旧在) 金剛峯寺
- 千手観音菩薩立像(伝源義経守本尊) 金剛峯寺

書跡

- 金銀字一切経(中尊寺経) 金剛峯寺
- 宝簡集 金剛峯寺
- 続宝簡集 金剛峯寺
- 紺紙金字一切経(荒川経) 金剛峯寺
- 西南院文書 西南院
- 源頼朝書状(複製) 霊宝館

工芸

- 花鳥文書 清浄心院
- 五鈷杵(伝行勝上人所持) 蓮華定院
- 梵字懸仏 金剛峯寺

※重美…重要美術品

ミュージアム法話開催

ミュージアム法話(お坊さんによる法話と展示案内)を
開催いたします。

- 日程 10月14日(土) 13時より
- 11月18日(土) 13時より
- 11月23日(木)・祝 11時より
- 約45分間、予約不要、参加費無料(要拝観料)

告知

高野山霊宝館友の会文化講座「平家物語の時代と高野山」
平家物語ゆかりの地を歩く」10月22日開催予定
※定員に達したため、受付は終了しております。

収蔵品の紹介 98

高野大師行状図画 十卷

紙本著色 江戸時代 安永10年 (1781)
成慶院蔵 縦30.2cm 源信鴻 筆



実際の大塔は二重屋根ですが、
本図では三重屋根になっています。

弘法大師空海の生涯を描いた伝記絵巻は、鎌倉〜室町時代に多くのバリエーションが作られました。高野山では鎌倉時代末〜南北朝時代頃に制作された、六巻からなる「高野大師行状図画」(地藏院蔵、重文)が知られています。

今回紹介する絵巻は、戦国大名・武田家の菩提寺として知られる成慶院に伝わるもので、十巻構成となっています。一卷巻頭に安永十年(一七八一)の源信鴻という人物による序文があり、目録によると、本絵巻の筆者として複数の公家関わっています。大半は源信鴻の筆によるものです。源信鴻は江戸時代中期の大名で、大和郡山藩(現・奈良県大和郡山市)二代藩主の柳沢信鴻(一七二四〜九二)の別名です。

信鴻は和歌・俳句・絵画などさまざまな文芸に秀で、観劇を好んだ文人大名で、『幽蘭台年録』や『宴遊日記』など公私における詳細な日記の著者としても知られます。絵に関しては、池大雅の師でもある、初期文人画家の柳沢淇園(一七〇三〜五八、別名柳里恭)から学んでいます。

写真の場面は「大塔修造」と題されており、本図が収録される

第十巻は全て信鴻の筆です。ていねいに描き込まれた人物や衣の彩色など、お殿様の趣味レベルではない、高い技量がかがえます。

「大塔修造」は地藏院本には収録されていない場面、平清盛(一一八〇〜一一八二)が安芸国(現・広島県)の宰吏(国司)であった時に、高野山の大塔の再建を果たすと、弘法大師があらわれて清盛の繁栄を約束した、というエピソードです。完成した大塔の前で、家来を連れた清盛が大師と対面しているようすが描かれています。各種弘法大師伝や『平家物語』によると、大師は清盛に、荒廃している厳島神社(安芸の宮島)を再興するように、そうすれば他に並ぶ者が無いほど出世するだろう。ただし悪いことをすれば子孫は栄えない、と告げたそうです。清盛はその後、高野山に自分の頭の血を混ぜた絵の具で描かせた阿曇茶羅(血曼荼羅)。第38回大宝蔵展で展示)を奉納し、厳島神社を修繕して篤く信仰しました。清盛の栄華と、その後の平家の行く末は皆さんご存じかと思えます。諸行無常、盛者必衰。

(福形安希子)

連載

高野山の古建築
第二十八回 金剛三昧院

鳴海 祥博



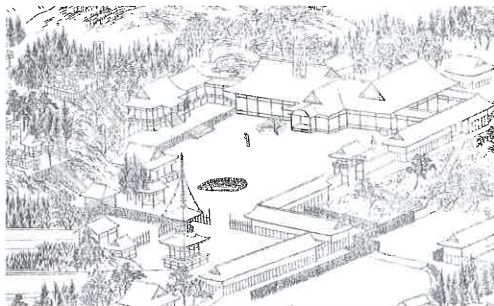
境内の様子 正門を入ると正面に本堂が建つ。右手に玄関の大きな屋根とその奥に客殿が見える。写真には写っていないが左手に多宝塔、経蔵などが建つ。



金剛三昧院の正門 一間一戸楼門という形式の門で、上層には梵鐘がつられているので「鐘楼門」ともいう。正面に「鼻張尊」と書かれた大きな扁額を掲げる。



『又続宝簡集』巻61に描かれた金剛三昧院 鎌倉時代の様子である。多くの堂塔、坊舎が建ち並ぶ。下方中央に多宝塔、左手に本堂と鳥居のある鎮守社が描かれ、現在の境内を思わせる。



『紀伊国名所図会』に描かれた金剛三昧院 180年前の様子が描かれている。建物やその配置の様子は現在もほとんど変わっていない。

境内の様子 正門を入ると正面に本堂、右手に客殿と台所、そして左手には八百年ほど前に建てられた高野山内最古の多宝塔や校倉造りの経蔵が建っています。金剛三昧院には古い建物とともに多くの寺宝が現存し

ていますが、火除けの鼻張尊の御利益とともに、このようにな少し離れた場所にあることも幸いしているのでしょうか。金剛三昧院は北条政子が源頼朝の菩提を弔うために創建したと伝えられています。「金剛三昧院」という名前は、寺蔵の政子自筆の書状に出てくるのが最初です。残念ながら書状に年号はないのですが、その内容から一二〇三から五年に書かれたものと考えられます。頼朝の没年、正治元年（一一九九）から間もない頃に創建されたのは確かなようです。

その後鎌倉、室町時代を通して高野山でも有数の大寺として存在していました。その経済基盤は鎌倉幕府の有力御家人による荘園の寄進で、それは遠く九州福岡や岡山、三重、大阪、和歌山などの各地に及んでいました。鎌倉、室町幕府にとって金剛三昧院は、強大な宗教組織である高野山を牽制する出先機関のような意味合いがあったのかも知れません。密教修行の道場である高野山にあって、金剛三昧院は禅

壇上伽藍から東へ、お大師さまの御廟奥之院へ向かう道は高野山の幹線道路で「壱路」と呼ばれています。この道を伽藍から東へ暫く進み、南に入る細い路地を谷沿いに歩くと、家並のとぎれた先に寺域を区切る「長老坊」「金剛三昧院」と刻まれた門柱が建っています。そこから更に山の斜面に添った道をたどって行くと、高野山内では珍しく人里を離れ、山と木々に囲まれた堂塔が姿を現します。正面の門は入母屋造り一間楼門という形式で「鼻張尊」と書かれた大きな扁額が掲げられています。鼻張尊はお寺に降り立った大天狗で火除けの守護神とされています。

その後鎌倉、室町時代を通して高野山でも有数の大寺として存在していました。その経済基盤は鎌倉幕府の有力御家人による荘園の寄進で、それは遠く九州福岡や岡山、三重、大阪、和歌山などの各地に及んでいました。鎌倉、室町幕府にとって金剛三昧院は、強大な宗教組織である高野山を牽制する出先機関のような意味合いがあったのかも知れません。密教修行の道場である高野山にあって、金剛三昧院は禅

僧であった栄西が開山と伝えられています。その真偽は確認できませんが、金剛三昧院に伝わる住職の系譜を見ると初代住職は退耕行勇という栄西の法灯を継いだ禅僧で、天福二年（一二三四）に「禅教律」の寺とした、とあります。つまり禅宗と密教と律宗を学ぶ寺とした、とあるのです。六代目住職の心地覚心は中国に渡って禅を伝え、後に由良（和歌山県由良町）に興国寺を建て、法燈派という禅宗の一派を確立した禅僧でした。金剛三昧院では古くは住職のことを長老、首座と称していますが、これは禅宗の呼称で、金剛三昧院はまさに禅宗寺院だったと思えるのです。鎌倉幕府の中樞に安達景盛という有力御家人がいました。景盛は鎌倉三代将軍実朝が甥の公暁に討たれたことを契機に出家し、この金剛三昧院に身を寄せました。その後義景、泰盛と安達三代が大きな後ろ盾となり、寺運は隆盛に向かったのです。（つづく）

小仏塔の世界⑤

奥之院出土金銅製宝篋印塔(続編)

公益財団法人元興寺文化財研究所

狭川 真一

奥之院出土の金銅製宝篋印塔を詳しく調べているおりに、靈宝館春期企画展において興味深い資料が展示されていました。「澄圓御影堂中壇田地寄進状」(「大日本古文書」家わけ第一 高野山文書之二 所収)と題されたものです。これは、宝篋印塔の銘文解釈を助けてくれる重要な文献になると思いましたが、で、大事な部分を抜粋してご紹介します。

「寄進 御影堂中壇田地事(中略) 相副善智御房之御骨之塔婆、同所令寄進御影堂也。(中略) 永仁四年八月十八日 澄圓」

要約しますと、「澄圓という人物が田地を)善智という人の御骨の塔婆(お骨を納めた塔婆)を副えて、

御影堂に寄進します」という内容です。ここには二つの大事なことが書かれています。一つは、永仁四年(二二九六)頃の高野山には、お骨を納める塔婆があって、それを奉納(納骨)したこと。もう一つは、中世の高野山での納骨は奥之院だけでなく、御影堂(壇上伽藍)でも行われていた、ということ。今回はこの二点を参考に、金銅製宝篋印塔の銘文を読み解いてみたいと思います。

金銅製宝篋印塔の銘文

この銘文については、当シリーズ第十四回の「小仏塔の世界③」でも少し紹介しましたが、ここで詳しく

考えてみます。銘文は宝篋印塔基礎の側面にあり、四面すべてに刻まれ

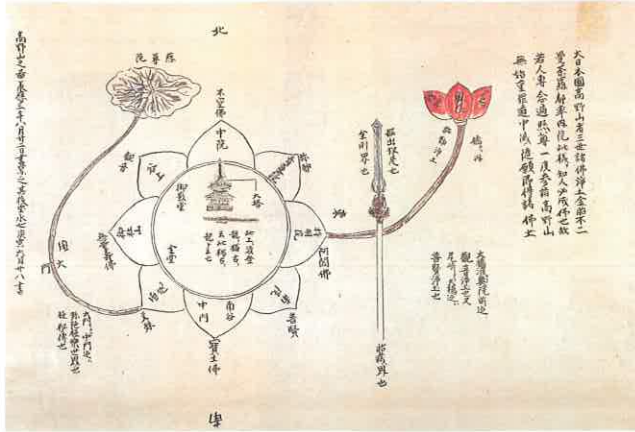
ていて、全部で四〇字を一〇字ずつ均一に配分し、それぞれの面では二



銘文①



銘文②



「高野山蓮華曼荼羅圖」(報恩院蔵)

字ずつで改行して各面五行とし、それを繋いで彫り込んでいます。その銘は、

①「大師／御入／定奥／院埋／土中」
 ②「安置／高野／山八／葉峯／上南」
 ③「保又／二郎／入道／遺骨／也弘」
 ④「安十／年六／月二／十二／日卒」
 (は改行)と読めます。四面とも一〇字ずつになるよう工夫していますので、連続して読み通しにくい部分もありますが、これまでは①から④の順番で読まれていました。このうち、②から③、③から④は人名と年号が二面にまたがって記載されて

いますので、一連の文章であることは明らかです。ところが、①と②を連続して読むのは少々難しいように感じていました。なぜなら、現在の解釈では八葉峯の中に奥之院も含まれており、①の「奥之院の土中に埋める」と②の「八葉峯に安置する」という文が、どちらもこの塔の出土地点を指すとみられるからです。つまり、なぜ同じ地点をわざわざ別の呼び方で記載したのか、という疑問が残るのです。

銘文の解釈

ここで大きなヒントになったのが、最初にご紹介した古文書です。この文書には、壇上伽藍の御影堂に納骨を行っていた、とありました。そのことを踏まえて、「高野山蓮華曼荼羅圖」(宝永七年／一七一〇、報恩院蔵)という絵を見ると、八葉蓮華の中にあるのは壇上伽藍であり、奥之院は別にのびる茎の先に咲く蓮華上(ここを弥勒浄土とみています)にあります。現在とは少し考え方が異なりますが、八葉峯の範囲はこの壇上伽藍を指していると思われるのです。この考え方がどこまで遡るものかは分かりませんが、仮に中世までこのような理解が及ぶと



銘文③



銘文④

なりますと、宝篋印塔の銘文②に見える「高野山八葉峯」は、壇上伽藍のことと理解できます。

そうなると、さきほどの疑問は氷解します。そして、銘文は②から読み進めると理解し易くなります。②から読み始めますと、「(これは)高野山八葉の峯の上(壇上伽藍の御影堂)に安置していた南保又二郎入道の遺骨である。(彼は)弘安十年(一一八七)六月二十二日に逝去した。(この遺骨を)弘法大師が御入定なされた奥之院の土中に埋める」となります。

つまり、南保又二郎の遺骨は当初、

壇上伽藍(おそらく御影堂)へ「御骨之塔婆」とともに安置(奉納)されましたが、しばらくして金銅製の立派な塔に遺骨を移し、奥之院のお大師様御廟の傍に埋納されました、と解釈できるのです。

わずか四〇字の中に、壇上伽藍と奥之院の両方に所縁を持てたことを明確に記載していたのです。このことは、南保又二郎の遺族にとつて、とても大切な事象だったことが分かります。



(公財) 和歌山県文化財センターの結城啓司氏による特別解説も行われ、拝観者は熱心に聞き入っておられました。

平成二十九年度夏期企画展「正智院の名宝」特別企画

伽藍西塔内部特別公開 イベント報告

夏期企画展「正智院の名宝」の開催に伴い、去る八月二十四日(木)・九月三日(日)に正智院とゆかりのある伽藍西塔の内部を特別公開いたしました。

西塔は仁和三年(八八七)、真然大徳によって創建され、現在の塔は江戸時代初期の寛永七年(一六三〇)に焼失したのち、正智院第三十七代住職英寂・三十八代覺道・三十九代乗如・四十代良應の尽力によって天保五年(一八三四)に再建されたものです。本尊は金剛界大日如来、周囲には胎藏界の四仏が安置され、根本大塔の胎藏界大日如来と金剛界四仏に対応する立体曼荼羅が表現されています。

公開期間中、西塔へは合計約一八五〇名が訪れ、内部の色鮮やかな彩色に驚いていました。天候に恵まれたこともあり、多くの人が晩夏の高野山を楽しんでいる様子でした。

〈同時開催イベント〉

◎ 国登録記念物「正智院庭園」(重森三玲作)の特別公開

重森三玲(一八九六〜一九七五)は近代日本を代表する作庭家で、京都東福寺や大阪岸和田城など、有名な庭園を手がけています。正智院の庭園は、背景には高野明神が現れたという伝承で知られる影

向岩(明神岩)を望む、枯山水の庭園です。

普段一般公開されていない庭園が見られるとあつて多くの方が訪れ、景色を楽しんでおられました。



画面中央、奥にある巨岩が影回石です。



正智院正面玄関
サルスベリが彩りを添えていました。

◎ 伽藍御影堂文化財防災設備ドレンチャー稼働の特別公開

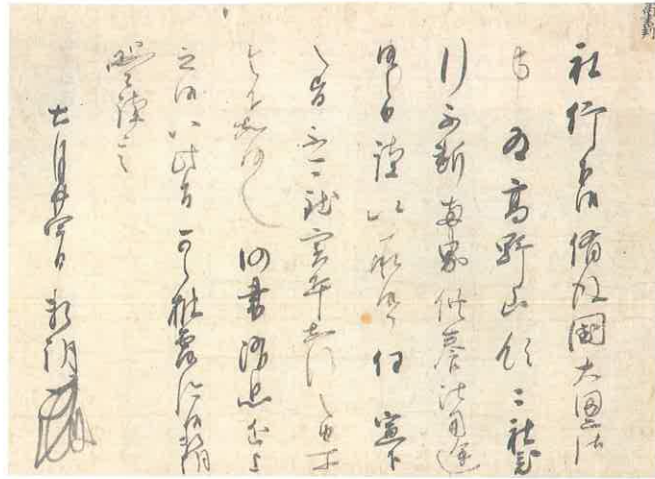
御影堂や国宝不動堂など主要な建物には、周囲や屋根から水を噴き出して火災が発生した際に類焼を防ぐ、ドレンチャーという設備を設置しています。実際の稼働の様子を見ていただくことで、文化財保護の重要性を感じていただけたかと思えます。



両日共に大勢のギャラリイが集まり、放水が始まると大きな歓声が上がっていました。

高野山の文書 (十二)

「源頼朝書状」について



源頼朝書状 (『宝簡集』巻2)

今回紹介する文書は、国宝『宝簡集』(金剛峯寺蔵)に収められている「源頼朝書状」という文書です。差出人の源頼朝(一一四七〜九九)は、鎌倉幕府をつくった人物として有名なため、霊宝館や他館で一度はご覧になった方もおられるかもしれませんが、簡単に紹介します。

この文書を現代語訳すると、「以前おっしゃられた備後国大田庄(現在の広島県世羅町一帯)の事について、大田庄を高野山領として、その年貢を不断両界供養法の用途に充てるようにとのこと、謹んで承りました。宣下の内容に則り、(大田庄を知行していた)土肥實平が知行するのをやめるように下知しました。よって、書状を進上しますの

で、その内容をご披露ください。頼朝恐々謹言(結びのあいさつ)という内容になります。しかし、これだけでは宛先も不明で、主語等がなく、内容がよくわからない文書です。そこで少し情報を補完してみましよう。

大田庄は、平清盛の五男、重衡が

後白河法皇に寄進した荘園でした。平氏滅亡後は、源頼朝の家臣である土肥實平が知行(簡単に言うと、依託されて経営)していました。ところが、文治二年(一一八六)、勸

進僧鏡阿の懇願により、大田庄は後白河法皇より高野山に寄進され、その収入は、高野山根本大塔で修する「長日不断金剛胎藏両部大法」の費用に充てられることになりました。書状中の「不断両界供養法」がこれにあたります。この法要は、源平の争乱の死者の鎮魂と、生者の安寧を祈るためのものであったことが別の文書で判明します。ちなみに当時の根本大塔は平忠盛・清盛が奉行として再建した塔だったので、多分に争乱の敗者である平家追悼の意味があったのかもしれない。

これらの情報を補完すると、この文書は、「備後国大田庄を源平争乱の犠牲者の供養法要の費用に充てるために、高野山に寄進するので、明け渡すように以前に後白河法皇から命令があったので、このたび土肥實平の大田庄の知行をやめさせまし

た。その事を記した書状を進上するので、この事を後白河法皇にご披露ください。頼朝。」という内容になります。そして、「後白河法皇にご披露ください」とお願いしているので、この文書の宛先は後白河法皇の近臣のどれかであったとわかります。

ここまで判明したところで、源頼朝から後白河法皇の近臣に出された文書が、なぜ高野山に残されているのかという疑問が残ります。通常、書状は宛先、ここでは後白河法皇の近臣の元に残るはずですが、ところが日本の中世社会では、その文書が利益をもたらす所に残るということがあります。この書状で利益を得るのは、大田庄を獲得した高野山なので、高野山のもとに、この文書が残ったのでしよう。

六年にわたる源平の争乱では、多くの犠牲者がました。その犠牲者の供養と、争乱の中心にいた源頼朝、後白河法皇や高野山の関わりを示す貴重な文書です。(研谷昌志)

※第38回大宝蔵展「高野山の名宝」では、今回紹介した「源頼朝書状」の複製を展示します。

〔翻刻文〕
被仰下候備後国大田庄
事、為高野山領、可被充
行不断両界供養法用途
候之由、謹以承候了、任 宣下
之旨、不可致實平知行之由、所
令下知候也、仍書消息進上
之候、以此旨可令披露給候、頼朝
恐々謹言

七月廿四日 頼朝 (花押)

高野山靈宝館からのご案内

これからの催し・展覧会

◎「密教の美術」

展示する機会が少ない、隠れた名宝の数々をご紹介します。(予定)

平成29年12月9日(土)～平成30年4月8日(日)
〔12/28～1/4休館〕

宝物貸出情報

○東京国立博物館

興福寺中金堂再建記念特別展「運慶」

9月26日(火)～11月26日(日)

国宝 八大童子立像のうち六軀

制多迦童子 矜羯羅童子

清淨比丘童子 恵光童子

恵喜童子 烏俱婆識童子

以上運慶作、金剛峯寺



国宝 制多迦童子立像

○京都国立博物館

開館一二〇周年記念特別展覧会「国宝」

10月3日(火)～11月26日(日)

国宝 響響指帰 上巻 金剛峯寺

〔10/17～29展示予定〕

国宝 法華経卷第六(色紙) 金剛峯寺

〔11/14～26展示予定〕

※詳細は各館のホームページをご覧ください。

◎イベント報告

○春期企画展 ミュージアムトーク



春期企画展「霊場高野山―納骨信仰の世界―」会期中に学芸員による展示解説を開催いたしました。高野山への納骨の歴史や変遷、その背景にある信仰について、参加者は熱心に聞き入っていました。

◎タモリさん来館

NHK総合で九月、三週にわたり放送された「プラタモリ」高野山特集。当館でも七月に撮影が行われました。

お詫びと訂正

前号の「古絵図で巡る高野山探訪(その五)」におきまして誤表記がありました。関係者各位にご迷惑をおかけしましたこと、お詫び申し上げますとともに、次記の通り訂正いたします。

8p 【誤】高野山遍照尊・院の覚数が
【正】高野山遍照光院の覚数が

高野山靈宝館 新館長就任

静慈圓前館長の任期満了に伴い、七月五日付で山口文章師(高野山五智院住職)が、靈宝館館長に就任いたしました。

ご挨拶

このたび、高野山靈宝館長を拝命いたしました。自らの浅学非才を省みて、その重責に身が引き締まる思いです。

当館は人文科学系博物館として県内トップの文化財収蔵量を誇ります。これほど質の高い文化財が集中して保管されているところは全国でもほとんど例がなく、「山の正倉院」と呼ばれるゆえんがここにあります。

高野山が有する夥しい数の文化財には、絵画・彫刻・工芸・書跡としての価値だけでなく高い宗教性が充満しています。また、この宗教性を分析すると、高度な精神性と数百年にわたる歴史により構築されていることがわかります。

ひとりでも多くの方が高野山靈宝館にお越しいただき、文化財に秘められた精神性と歴史の魅力を感じていただくことを願っています。

高野山靈宝館長 山口 文章

ガマズミ・茨薙・ねそのき・振苧木 こうのき・神の木

元高野山高等学校長 亀岡 弘昭

ガマズミはスイカズラ科・ガマズミ属の落葉低木です。

高野山塊では山麓部から山頂部にかけて自生しています。

里山と呼ばれる人家に近い雑木山の縁や山道脇などでも見(観)られます。初夏の花時、秋の実が赤熟する時期以外は、さほど目立たず、現在では、人との係わりの、特に多いという樹ではありません。



ミヤマガマズミの花



ガマズミの果実

ところが、往時は、身近に自生するということもあり、特に、幹や実が色々なことに利用されたといい、多くの方言名があります。

それらのうち、この樹の強靱な細長い若木の幹を数本、振って、柴木や薪などを結束するために用いたことに由来するという、ねそ(振苧)、ねそのき(振苧木)、ねじき(振木)、しぶれ(縛るの転訛)などが、この

樹の成木の幹でつくった杖は魔除けになるという信仰のある地方が点在し、かめがら・かみがら(神柄)、こうのみぎ(神の幹)、こうのき・こうのき(神の木)などの、それぞれの地方名があります。こうのきは「降魔の木」の転訛ではと想ったりしています。

この幹は鍛冶屋さんや石屋さんの大型の鉄の鎚・玄能(玄翁)や鎌などの柄にも用いられたそうです。

秋の赤熟した果実の汁液は、古くから布や紙などを染める(摺染・摺込染)ために用いられたといい、そのことに由来するという方言名は多く、その一部をあげると、いつずみ、うますみ、おおずみ、すずみ、ようずみ、そぞめ、ゆうぞめ、ようぞめなどが。

牧野富太郎博士は「植物記」に「...実の中に赤い汁を含んでいて其味が酸く、能く田舎の子供が採って食している、處によっては之れを漬物桶へ入れて漬物と一緒に壓し其漬物に

赤い色を附與するに用い」と、書き遺されています。この実の味は人によって酸っぱい、甘酸っぱい、などと書かれています。

和名・ガマズミの命名由来は「実を染め(ずみ)に用いる神が木」「神がずみ」「降魔ずみ」、実の味による「甘酸実」などを想像しています。字については、中国の古い本草書を手本とされたと思われる、北京市・商務印書館・北京版・修訂本や「和漢三才圖會」などで茨薙(けうめい・キツミイ)とあり、両書ともに薬用としては解熱・消化の効があり、幹や枝の煮汁に米を加えて作った粥は美味、という意味のことが記載されています。日本でも、この字が慣用されています。

高野山上では、このガマズミと同属のミヤマガマズミ、コバノガマズミも自生しています。ミヤマガマズミは奥山(深山)を好み、ガマズミと比べ小振りで静やかです。